

コメディリリック第2回「ただのホラー」

「ナイトクルージング」

登場人物

美奈子 ミーニー・アイリツシユ

倫之助 ペイリー・チャイルド

白石 シロスコフ

ベントツ（回想） 野彦

※美奈子、倫之助、白石、板付き

【L・明転】

ロッジで怪談話を楽しむ三人

白石

「海いいいい！つて齋藤が叫んだあと、急に辺りが暗くなって、すると波打ち際に無数の手が出てきて齋藤の身体を引きずり込んで」

倫之助

「こわ！」

「でもあの時、あいつ全て諦めてたから、もう何も抵抗してない。だから急いで俺が引きずり上げて」

美奈子

「まだショックがね」

白石

「生きることは諦めるな！」つて叫んで、だつて生きるために全て諦めるんだから。もう必死になってあいつを陸に上げて」

倫之助

「大丈夫だったの？」

白石

「命はね。陸に上げたら、海から「ケラケラケラー」つて聞こえて、手も消えて」

美奈子

「よかったねー」

白石

「でも、齋藤、それから、女の事しか考えられなくなつてしまつて」

美奈子

「こわっ！一番怖い」

白石

「そうなんだよー。仕事もずっと休んでるみたいで。だから、流石に俺も距離置いて、今回のキャンプ旅行も誘わなかつたんだよね」

倫之助

「いや、仕方ないよ。何かあつてからじや遅いし、何かあつた時にはなるべく遠くにいたいし」

白石

「だねー」

美奈子

「てか、海の声も性格悪いねえ」

倫之助

「え、どこだっけ？」

白石

「逗子」

倫之助

「逗子かー。逗子で泳ぐのやめよう」

白石

「あの辺が地元の友達に聞いたたら、解散したキマグレンの怨霊だつて」

倫之助

「何だよキマグレンの怨霊つて。キマグレンまだ生きてるでしょ？」

白石

「生霊」

倫之助

「何の恨みがあるんだよ」

白石

「二人は無いの？怪談というか」

美奈子

「私もあるよ」

白石

「え、教えて」

美奈子

「今年の七夕を過ぎたくらいの出来事なんだけど」

〔M・怪談―C〕

美奈子

「その日、私は急に飲み誘われて慌てるように支度をし、恵比寿の自宅を出た」

白石

「うんうん」

美奈子

「家の前でタクシー呼ぶために夜道に一人立っていた。すると、まっくろーいベンツが急に目の前に止まった」

白石

「えー」

美奈子

「ガチャつとドアが開いたら…見たことのある顔…」

※ベンツ、登場

回想としてベンツが現れる

美奈子

「その男は少し前に参加した業界人とか社長しか参加できないパーティーで知り合った人だったの」

白石

「へー」

倫之助

「…うるせーなあ…」

美奈子

「そのベンツの男は私に…」

ベンツ

「今度クルージング行こうよ」

美奈子

「って誘ってくれた人で、連絡先だけは交換していた。別にクルージングくらい私には珍しいことじゃないんだけど」

倫之助

「何があつたかだけでいいんだけどなあ」

美奈子

「偶然通りすがつたベンツの男がレイバンのサングラスを外して突然…」

ベンツ

「どこ行くの？」

美奈子

「と聞いてきた」

白石

「急に」

美奈子

「私はつい「麻布十番です」って答えてしまつて。その日は麻布十番でよく飲んでる友達に誘われたから麻布十番に行く予定だったの」

倫之助

「…イライラしてきた…」

美奈子

「そしたら…」

ベンツ

「乗せてつてあげるよ」

美奈子 「私は少し恐かったんだけど、静かに頷いて、助手席に乗り込んで。そしたらブオオオオオオオオオって車が走り出して」

ベンツ 「ブオオオオオ」

美奈子 「やっぱりいい車は加速が違うんだなっ
て」

倫之助 「…酒飲んでえ…」

美奈子 「運転しながら彼が色々聞いてきて…」

ベンツ 「素敵なフアツションだね。どこのブランドが好き？」

美奈子 「好きとかはないけど、エルメスやグッチのレセプションパーティーには誘われて行きます」

ベンツ 「へーエルメスね」

美奈子 「その瞬間、私のひざ元にエルメスのバッグが現れて！」

ベンツ 「それあげる」

美奈子 「って」

白石 「突然？」

美奈子 「そう。突然。エルメスのバッグなんてどこにも見当たらなかったのに」

白石 「えー」

倫之助 「…帰っていい？」

美奈子 「でも私は断ったの。大丈夫です。自分のバッグがあるので必要ありませんって…そしたら、そのベンツの彼が私の耳元で囁いたの…」

ベンツ 「いい女だな」

白石 「えー」

美奈子 「気付いたら、鳥肌が立っていて、高級車の冷房って効きやすいから。震える私に彼は」

ベンツ 「海外行くならどこがいい？」

美奈子 「って聞いてきて、今ならあえてのシンガポール。って答えて」

ベンツ 「お酒は何が好き？」

美奈子 「なんだかんだでシャンパン。って答えて」

ベンツ 「シャンペーン。僕も好き」

美奈子 「少し寒気がした。でも、ここでふとって…麻布十番ってこんなに遠かったっけ？って」

白石 「え」

倫之助 「おーそれはちよっと」

美奈子 「怖かったんだけど、私は勇気を出して彼に聞いたの「麻布十番に向かってますか？」って、そしたら…」

ベンツ 「君と話したくて少し遠回りしました」
白石 「えー」
倫之助 「ちっ」
美奈子 「私が戸惑っているうちに彼がウブロの時計を見せながら」
ベンツ 「ごめんね」
美奈子 「って一言呟いてアクセルを強く踏み込んで」
ベンツ 「ブオオオオオオオオ！ブオオオオオオオオ！ブオオオオオオオオ！」
美奈子 「やっぱり高級車が煽ると他の車どんどん避けてくれるんだよねえ。もうスイスイ進んで」
倫之助 「そのまま事故んねえかな…」
美奈子 「急いでくれてるのは嬉しかったんだけど、かなり速度が上がったのにアクセル緩めないの」
ベンツ 「ブオオオオブオオオオオ！ブオンブオンブオン！ブオオオオオンンン！」
美奈子 「…流石にやだなあ…怖いなあ…って思っつけてきて、その瞬間、ドン！って物音がして」
ベンツ 「ドン！」
白石 「えっ？」

美奈子 「人を轢いたの」
倫之助 「…はは、ざまあみろ」
美奈子 「フロントガラスの向こう側に血だらけの男が倒れていて、私、すごく動揺して悲鳴を上げてしまっ…でも彼は車を止めなかった」
白石 「え」
倫之助 「…え？」
美奈子 「そのまま何事も無かったかのように、アクセルを踏んで車を発進させたの」
ベンツ 「ブオオオオオ！」
倫之助 「…なにそれ、轢き逃げじゃん」
美奈子 「私、怖くて最初は何も聞けなかったんだけど…あまりに何事も無かったかのように彼が車を運転するから…え…大丈夫ですか？」って聞いたたら」
ベンツ 「大丈夫だよ」
美奈子 「って彼が答えて。その瞬間、またドンッって音がして」
ベンツ 「ドン！」
倫之助 「えっ、また？」
美奈子 「そう、また人を轢いてしまっ…私…高級車に乗ったことは本当何回もあるし、全然普通のことなだけ」

倫之助
美奈子

「そういうのもういいから」
「人を轢いた車の助手席に座っているの
なんか初めてで、それも二度も、私：気
が動転してしまつて」

倫之助
美奈子

「そりや動転するよな」
「過呼吸みたいになつちやつて、そして
ら彼がシャンパンを後部座席から取り出
してくれて」

ベンツ
倫之助
美奈子

「飲みなよ」
「何でそいつそんな落ち着いてんだよ」
「私は手を震わせながらグラスにシャン
パンを注いでとりあえず一口ぐりと飲
んで、その瞬間またドンツ！つて音がし
て」

ベンツ
倫之助
美奈子
倫之助
美奈子

「ドンツ！」
「え：また？」
「フロントガラスを覗いたら、またさつ
きみたいに血だらけの人が倒れてて：」
「えーマジやばいじゃん：」
「私、怖くて、もう頭の中が真っ白にな
つて：私も捕まるのかな？とか：何で最
初の事故の時にこの人止まらなかつたん
だろう：とか、本当に色々考えてしまつ

倫之助
美奈子

て：でも、その時、ある事に気づいてし
まつた」
「え、なに？」
「車の前で血だらけで倒れてる人ね、最
初に轢いた人と同じ人なの」

倫之助
美奈子

「：え？」
「最初に轢いた人と同じ人が目の前に倒
れてるの、そしてよく思い出したらさつ
き轢いた人も同じ人なの」

倫之助
美奈子
倫之助
美奈子

「え？」
「3回、同じ人を車で轢いていたの」
「え、どういうこと？」
「私、気づいたから「え：同じ人：」つ
て呟いて、そしたら彼が」

ベンツ
美奈子
ベンツ
倫之助
美奈子

「そうなんだよー」
「つて言つて、また車を発進させて」
「ブオオオオ」
「え、マジでどういうこと？」
「もう私わけわかんなくて：とりあえず
手に持ったシャンパンを後部座席に戻そ
うと思つて、後ろを振り返ったら：さつ
き轢いた男が血だらけで横たわつてい
た」

倫之助

「え」

美奈子 「私「いやあああ」って叫んで。そしたらどんだん気が遠くなっている…そのまま気絶してしまつて」

いなくなるベントツ

倫之助 「ええ!？」

美奈子 「目が覚めたら…船の上にいるの」

倫之助 「船?」

美奈子 「ただの船じゃないよ」

倫之助 「どういうこと?」

美奈子 「シンガポールにさ「マリーナ・ベイ・サンズ」っていう上にでつかい船が乗った超高級ホテルがあるの知ってる?」

倫之助 「聞いたことあるけど」

美奈子 「その船の上の屋上のプールにいたの」

倫之助 「ええ?」

美奈子 「目を覚ました私に気が付いたベントツの

彼がプールからざつばあああつて上がつてきて」

美奈子 「水着のベントツが現れる

ベントツ 「ざつばあああ」

美奈子 「私の顔を見て」

ベントツ 「目が覚めた?」

美奈子 「って声をかけてきて」

倫之助 「ええ!？」

美奈子 「続けて一言」

ベントツ 「ごめんね」

美奈子 「って言ってきた、問いただしたら…」

ベントツ 「人を轢いたせいで色々面倒くさいことになっちゃったからさ、大丈夫になるまで自家用ジェットで国外から逃げてきたんだ」

倫之助 「…はあ?」

ベントツ 「気絶した君を放っておけなくてさ、行きたいって言ったシンガポールにしたよ。マリーナ・ベイ・サンズ。素敵な景色だろ?」

倫之助 「ちよつと…色々追いつかない…」

美奈子 「混乱して戸惑ってる私に彼が」

ベントツ 「約束が守れてよかった」

美奈子 「って呟いたの。分かっている顔を見せてる私に彼はこう続けた」

ベントツ 「「クルージング行こうって約束したよね?」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

美奈子 「って…」

「M・怪談―FO」

消えるベンツ

倫之助 「…え、終わり？」

美奈子 「うん。終わり」

白石 「こえええええ」

倫之助 「いや…怖い…かな？…怖い話？」

美奈子 「私、昨日までシンガポールにいて」

白石 「あーそうなんだ。え、もう大丈夫ってこと？」

美奈子 「うん。大丈夫みたいで」

白石 「こえええええ」

倫之助 「いや、怖い…かな？怖い話？」

白石 「だってさ、高木よく考えてみ」

倫之助 「え」

白石 「この世界って、お金持ちなら何やっても許されるってことだよ」

倫之助 「…うわあああああああ！」

白石 「な？」

倫之助 「超怖え…超怖えよ…」

美奈子 「本当に…フラッシュモブでプロポーズされるくらい怖かったよ…」

白石 「いやー…お疲れ様でした（拍手）」

美奈子 「ご清聴ありがとうございました」

白石 「高木は無いの？怖い話」

美奈子 「倫之助君の話も聞きたい」

倫之助 「俺かー。いいよ。話すよ」

白石 「うんうん」

倫之助 「この前、大学時代ののサークルの友達と肝試しやってさ…」

「M・怪談―C」

【L・暗転】

―了―